

# 新霊性文化の源流

— 対抗文化と山尾三省に着目して —

## Origins of New spirituality culture

— Focusing on Counterculture and Sansei YAMAOKA —

博士前期課程 教養デザイン専攻 2013年度修了

寺 西 薫

TERANISHI Kaoru

### 【論文要旨】

日本において「精神世界」や「スピリチュアル」として知られる潮流は、1970年代後半に興隆し、現在に至っている。宗教学者の島蘭進はニューエイジ、精神世界、新宗教の一部を包括する概念として「新霊性文化」という定義を示し、この潮流の日本における学術研究の礎をつくった。

本稿では、新霊性文化の背景にある思想的な前提を見出すことを目的とし、対抗文化を日本における新霊性文化の源流としてみていく。なかでも、日本初のコミュニケーション運動「部族」と「部族」の一員であり、百姓・詩人・信仰者であった山尾三省（1938-2001）という人物に着目する。社会全体が経済成長を目指し急激な変化を遂げるなか、霊性を希求し、自然回帰的な生活を目指すオルタナティブな暮らしを選択した人々の生き方と新霊性文化の歩みを照らし合わせることによって、新霊性文化の意義とその可能性を問う。

【キーワード】 新霊性文化、精神世界、対抗文化、山尾三省、アニミズム

### 1. はじめに

本稿では、1960年代の対抗文化と日本の新霊性文化である「精神世界」との結びつきを明らかにし、その動向と世界観を探る。これまで日本の新霊性文化研究のなかでは、日本の対抗文化の動きは、ほとんど評価されることはなかった。こうした先行研究の動向をもとに、日本の対抗文化を新霊性文化の源流の一つとして捉えようとする独自の試みが本稿の趣旨にあたる。

新靈性文化の世界観というものは、対抗文化以来の歩みによってどのようなものとなってきたのか。この点を明らかにするため、60年代以降の対抗文化から新靈性文化への道を歩んだ代表的な人物として、日本初のコミュニオン運動「部族」の一員であり、詩人・百姓・信仰者であった山尾三省という人物のライフヒストリーとその思想について考察する。山尾は「部族」の中心であり、詩人・百姓・信仰者であり、生態系を重視するエコロジーの思想を持ちアニミズムに文明の希望を見出した人物である。晩年には、靈性の故郷に還るという死生観を持ち、生涯を通じて平和という自己の内なる真実を求め、屋久島の大地に、天空の星々に…一切の森羅万象のなかにその身を還していった。

山尾の対抗文化から始まった靈性の旅、それはヒッピームーブメントから派生する全世界的な動き、新靈性文化の旅でもある。60年代の対抗文化の時代から全世界で新靈性文化が興隆した時代を生きた「精神世界」の先駆者ともいべき山尾三省。彼の遺した詩や著作は、今の時代にどんなメッセージを発しているだろうか。山尾という人物を取り上げることにより、新靈性文化の思想に具体性を持たせ、新靈性文化に関わる人々一般に持たれうる実感と思想的な展開について考察する。また、宗教と科学とを超える、新しい文明の創造者であるという明確な自覚を持つ新靈性文化に関わる人々の志向性を描き出しつつ、その理想と表裏一体かのように商業化傾向がみられる新靈性文化の事例を取り上げる。新靈性文化内に生じる葛藤にも着目し、共感的理解と批判的検討を試みる。以上の観点によって、新靈性文化の思想的な源流とこれからの新靈性文化の深化を問うことを本稿の目的とする。

## 2. 新靈性文化とは

### 2-1. 世俗化論と宗教の新たな動向

宗教社会学の領域においては、戦後から1960年代を通じ、近代化に伴い宗教のもつ影響力は次第に縮小するという意味での「世俗化」の問題が盛んに議論されていた。世俗化の理由として、政教分離による近代国家の建設・近代的合理主義の導入・地域共同体の解体等が挙げられ、それぞれに検討されてきた。

世俗化の議論の対象となった宗教とは、主に伝統的な宗教教団のことである。これについて宗教学者の島蘭進は、伝統的な宗教教団だけに焦点を当てるのは不十分であり、伝統的な宗教教団にかわる新宗教が影響力を強めたり、集団形式をとらない文化の中に宗教性が埋め込まれたりすることも考慮されねばならないと指摘している<sup>1)</sup>。

ここでいう宗教性には、新宗教・新新宗教・新しいスピリチュアリティが挙げられている。なかでも、1970年代には新宗教にも新新宗教にも分類することのできない、宗教に似た新たな動きが生じた。それが、新しいスピリチュアリティである。制度的な宗教の形をとらずに、個々人が“宗教なるもの”“聖なるもの”と関わりあう動きである。これが、日本でいうところの「精神世界」や「スピリチュアル」という領域として考えられる。これはアメリカ合衆国の対抗文化

から派生した「ニューエイジ」に大きな影響を受けているとされる。

島菌の指摘にあるように、世俗化の進行を横目に、そのもう一方で生じる動きについての考察は既に1960年代になされていた。社会学者のトーマス・ルックマンは、人間はいつの時代にも自己と世界を関係づけるために包括的な意味体系、すなわち世界観を必要とすると述べている。そしてどんなに世俗化が進み、制度的宗教が衰退していくようにみえても、代わって制度的な宗教の形をとらない私的宗教性が台頭するというのだ。ルックマンのいう「見えない宗教」を新宗教の一部やニューエイジ、精神世界に見出し、これらを包括する概念として島菌は「新霊性運動＝文化」<sup>2</sup>と定義した。

島菌は、上記の概念を90年代初頭に提唱し、その世界観を『精神世界のゆくえ—現代世界と新霊性運動—』にまとめている。島菌は、現代社会における新たな宗教的な動きを宗教史に位置づけた先駆的な研究をしており、それは以後のスピリチュアル研究の指標となっている。

## 2-2. 新しい宗教文化を巡る議論

「精神世界」の語が広く浸透するきっかけになったのは、1978年6月に東京・新宿の紀伊國屋書店で「〈瞑想の世界〉特集・精神世界の本」というブックフェアが開催されたことであった<sup>3</sup>。以後、80年代前半には多くの書店に「精神世界」のコーナーが登場するようになり、今日でも哲学・宗教・心理・東洋思想のコーナーに隣接して「精神世界」「ニューエイジ」というコーナーが設置されているのを見ることができるといえる。それらのコーナーでは、輪廻転生、東洋医学、セラピー、チャネリング、東洋のグル、神秘主義、密教、禅のほか、トランスパーソナル心理学、ニューサイエンスなどの多岐にわたる内容の本が並べられている。今日の傾向をみると、上述のようなスピリチュアルな事柄を知り、生活に上手く取り入れることによって、人生を変え、幸福（縁やお金、成功など）を引き寄せようという現世利益的な意図が垣間見える。

もともと日本の「精神世界」は、アメリカで70年代以降に広がったニューエイジに大きな影響を受けている。宗教社会学者の伊藤雅之は、「ニューエイジは、60年代に欧米の若者の間で広まった対抗文化（現状の社会体制や価値・規範に異議申し立てをする社会・文化運動）、そのなかでも人間に内在するスピリチュアルなものを重視し、『意識変容が社会変革につながる』と主張する人々がその源流の1つである」といい、「ドラッグによる意識変容の試みや、若者たちによる（たとえば性の解放をめざす）実験的な共同体などはその後のニューエイジに発展していったと考えてよい」としている<sup>4</sup>。なお、ニューエイジはインド・ヒンドゥー教のグルや禅などの東洋の宗教の教え、または修行法やその文化的伝統にスピリチュアルなものを見出していった。

このように、アメリカでは1960年代にカウンターカルチャーが、1970年代にはニューエイジ運動が展開する。日本では1970年代後半に、アメリカにやや遅れてニューエイジに重なる「精神世界」と呼ばれる動きが流行した。「精神世界」はニューエイジと大幅に重なりあう性格のものである。つまり、日本の「精神世界」は、ニューエイジの思想を取り入れながら、日本やアジ

アの霊性を再認識していったという側面があるのである。

島菌は、日本の新宗教研究の延長線上に「新霊性文化」を位置づけ、新宗教には括ることのできない1970年代以降の宗教現象を概念化した。「宗教」ではなく「霊性」を追求する、世界同時多発的でグローバルなつながりを持つ宗教現象であることが強調されている。そして、伝統宗教（なかでも救済宗教）の制度を超え、近代文明の次の時代を創造するという自覚のもとに、科学と霊性が融合できるという視野も含まれているという点において、近代超克を目指す新しい文化ということになる。

### 2-3. 新霊性文化の世界観

新霊性文化に関与する人々の世界観、つまり、信念・価値のパターンを抽象化したものをまとめ、本稿で使用する新霊性文化の世界観の固定化を試みる。島菌の『現代救済宗教論』の中では、新霊性運動の思想や態度の主な特徴が5項目挙げられ<sup>5</sup>、『精神世界のゆくえ』の中では、ニューエイジの信仰世界の信念や観念のリストが19項目リストアップされている<sup>6</sup>。

島菌は新霊性文化の適用範囲をアメリカの「ニューエイジ」と日本の「精神世界」と、新宗教のなかでも比較的、組織性の弱い総体の3分野としている。従って、新霊性文化の思想の特徴のみならず、ニューエイジの信仰世界の観念のリストも、新霊性文化として包括される文化現象総体の価値・信念のパターンと考えられる。この二つの比較と考察を行い、新霊性文化の世界観をまとめてみたい。

まず表1では、二つのリストの共通項をまとめるとともに新霊性文化の世界観のリストを再構成した。表2では、二つのリストにおける新霊性文化における普遍性の高い項目の共通項について、伊藤雅之が提示するニューエイジ研究における分析概念の三要素（1）世界観（2）実践形態（3）担い手の意識を用いて、まとめた。

表1. 新霊性文化の主な世界観のリスト

- |  |
|--|
| (1) 自己変容あるいは霊性的覚醒の体験による自己実現  |
| (2) 宇宙や自然の聖性、またそれと本来的自己の一体性の認識   |
| (3) 旧来の宗教や近代合理主義から霊性／科学の統合へ  |
| (4) 現代は人類の霊的進化の大きな転換点であり、個々人の霊的覚醒はこの霊的進化の過程の一部である                              |
| (5) 外部の超自然的力やカリスマ的存在に依存する「宗教」に代わって、自立的な個人の覚醒による「霊性」(spirituality)の開発こそ必要とされている |
| (6) 感性・神秘性の尊重  |
| (7) 自己変容は癒しと環境の変化をもたらす   |
| (8) 死後の生への関心   |
| (9) エコロジーや女性原理の尊重  |

(出典) 島菌進『現代救済宗教論』(1992, pp.235-236)『精神世界のゆくえ』(1996, pp.31-35)に基づき、筆者作成)

## 表2. スピリチュアリティ研究の3つの分析概念による考察

<ul style="list-style-type: none"><li>・自己変容あるいは霊性的覚醒の体験による自己実現<ol style="list-style-type: none"><li>(1) 世界観：自己変容、霊性的覚醒により、本来的な自己あるいは次元の異なるリアリティという究極へ至る。</li><li>(2) 実践形態：意識変容のための学習や瞑想、身体のワークなどの修行をする</li><li>(3) 担い手の意識：自らの霊魂がより高度なものになり、本来的な自己へ近づくことで充実した人生を掴む。</li></ol></li><li>・宇宙や自然の聖性、またそれと本来的自己の一体性の認識<ol style="list-style-type: none"><li>(1) 世界観：宇宙や自然、また人間の中には、神的なものや霊的なものなどという、聖なるものが内在している。またそれと本来的自己は一体である。</li><li>(2) 実践形態：宇宙全体に存在する霊的なものと、身近な存在を通して触れる</li><li>(3) 担い手の意識：量子論等の現代科学の展開と全体論的な考え方の広がりによって、そうした本来的リアリティの存在が証明できる。</li></ol></li><li>・旧来の宗教や近代合理主義から霊性／科学の統合へ<ol style="list-style-type: none"><li>(1) 世界観：現代科学は近代の二元論的科学を越えつつあり、最新の科学は新たな霊性の探求を証明するような新しい宇宙観や生命観を提示している。</li><li>(2) 実践形式：ニューサイエンスなどと呼ばれる分野における研究。</li><li>(3) 担い手の意識：霊性と科学が合致し、明るい未来が開ける。そして自らがその新しい文化の担い手であるという自覚がある。</li></ol></li></ul>
--

(出典) 表1のリストの主な1～3の項目を基に、筆者が3要素を用いて分析。

表1の世界観が新霊性文化の特徴的な価値体系になる。そして表2は表1の(1)～(3)の項目を3つの分析概念によってまとめたものである。このリストによって、新霊性文化の世界観の輪郭がみえてくる。

他にも、伊藤雅之は、ニューエイジに関して質の高い議論を展開するヒーラス、ベックフォード、島蘭という3人の研究者の概念を手がかりとし、「外的な対象への崇拝よりも、自己の内面的探求に重点を置くこと」をニューエイジ思想の大きな特徴としてまとめている<sup>7</sup>。そして、独自の見解として、ニューエイジの思想的特徴を、究極の「リアリティ(状態、目的)」とそこへ至る「手段(媒介)」から成り立っていると述べた。ニューエイジにおける究極のリアリティとは、ホリスティック(全体論的)でトランスパーソナル(超個人的)な世界であり、その究極に至る手段として個人の聖性が強調されるという解釈がなされている。これは島蘭の示した新霊性文化の世界観のリスト全体にも通じるものであり、新霊性文化に関わる人々の認識と行動に広く適用できると考えられる。

### 3. 対抗文化から新霊性文化へ

#### 3-1. 50年代～70年代の日米の対抗文化を巡る動き

70年代後半に隆盛した新霊性文化のかたちである、日本の「精神世界」はどのような経緯で発展してきたのだろうか。経済至上主義、物質文明を基準とする幸福像の支配、生態系の破壊。

これらに対する反省によるオルタナティブ（代替的）な生き方の模索をした対抗文化人は日本にも確かに存在していた。彼らの主張と実践の中にみられる新霊性文化的な世界観を確認することにより、「精神世界」の世界観の根本にある思想性を見出していきたい。

50年代、アメリカには、ビート・ジェネレーションと呼ばれた若者達がいた。第二次世界大戦後のアメリカの繁栄と右傾化、拝金的物質文明に打ちのめされながらも、そうした環境や社会体制に順応せず、放浪・ジャズ・マリファナ・瞑想といったアウトサイダー的な生活を送ることによって人間性を取り戻そうとした人々である。詩・小説・音楽により、精神革命を起こしたビートニクは、20世紀に生じるムーブメントのさきがけとなっていった。

しかし、いくら支配的な社会体制に苛立とうとも、ひとたび、そうした社会体制からドロップアウトすれば、生活上または社会上打ちのめされることになる。それにも関わらず、社会に愛想を尽かした若者たちがいた。彼らは、太古の豊かな生命力を呼び覚ます力強いリズムを愛したビートニク（ビートには—①打ちのめされる（南部の黒人が“貧乏”という意味で使っていた）②ジャズのビート③至福という意味がある）と呼ばれ、ヒッピーに先駆けて、精神の荒野に「至福（ニル）の境地（ヴァーナ）」を求めたのである。ビートニクの代表的詩人であるアレン・ギンズバーク、そしてゲイリー・スナイダーは、日本の60年代以降の新宿ビートニクークommunion運動「部族」と関わりあい—ヒッピームーブメント、ニューエイジ運動に大きな影響を与えたといわれている。

次に、彼らと日本のムーブメントとの関わりについてみていきたい。60年安保闘争を横目に、日本にもビート・ムーブメントの胎動が動き始めていた。日本において、はじめて若者文化が登場してくるのもこの頃である。62年には「THE MAGAZINE FOR MEN」と銘打たれた青年男性向け雑誌『平凡パンチ』が創刊され、若者たちのバイブルとなり、それまでほとんどもたらされることのなかったアメリカの若者文化の情報が大衆にもたらされるようになっていった。また、63年には新宿でアートシアターが建設され、アングラ劇団が盛況、モダンジャズも全盛を極めていくのである。

アメリカで日本のグリニッジ・ビレッジと紹介されたクラシック喫茶「風月堂」にはアメリカやヨーロッパのビートニクが多く出入りし、情報ももたらされていた。1923年（大正12年）生まれのナナオ・サカキを中心として新宿には後にマスコミから「和製ビートニク」と呼ばれる人々が存在していた。

1956年に京都に移住し、禅修行をしていたゲイリー・スナイダーとインド放浪でヒンドゥー教を学んでいたアレン・ギンズバークは1963年にナナオ・サカキと出会う。60年代新宿ビートニク達は、東洋思想・禅瞑想・実存主義を研究するなど、可能な限りの手段を尽して、社会の流れを逆行する知的アウトロー達であった。67年には、こうした孤独な放浪者であったビートニクの内部から、近代個人主義を超克する新しい共同体意識が目覚め始めた。産業中心社会の内部で異相の共同体社会を建設する試みが生まれたのである。それがコμμyun運動「部族」の始ま

りであった。ナナオ・サカキ、長沢哲夫、山尾三省、山田塊也、ゲイリー・スナイダーらが「部族」結成に関わり、長野県諏訪郡富士見、奄美群島の諏訪之瀬島、東京国分寺の三拠点を中心に「部族」が結成された。

「部族」という名は、未開を意味しつつも、自然をこよなく愛して生きていく者達の呼び名であるという<sup>8</sup>。「部族」の仲間達は、自然の流れでもって、ネイティブアメリカンの民が持つ深い静けさと平和の光景を「部族」社会の理想のイメージとしていた。つまり、日本社会に生まれた「部族」は、そうした人間の原感覚に対する憧れを抱き、親しい仲間による自由・平等・博愛を目指したコミュニンであったのだ。

1967年5月には『アサヒグラフ』に新宿ビートの特集、9月にはNHK「現代の映像シリーズ」「ある青春の砦」という番組で長野の雷赤鴉族と諏訪之瀬のがじゅまるの夢族が取り上げられるなどマスコミへの露出がなされた。67年は日本の対抗文化の華々しい時代であったといわれる。

60年代～70年代はじめの時代には、アメリカでサブ・カルチャーの枠を超え、カウンターカルチャーが成立した。ベトナム戦争の拡大、人種問題の激化、公害問題の深刻化などを背景として、若者達の新たな思想・価値体系・ライフスタイルが強大な影響力を持つようになったのである。

特に、67年という年は、アメリカ西海岸のヒッピームーブメントにとっても重要な年で「サマー・オブ・ラブ」と呼ばれたヒッピームーブメントの最盛期であった。アメリカ西海岸からニューエイジ雑誌『オラクル』が新宿ビートと呼ばれた日本の「部族」の手元に届くようになるのもこの頃であり、ヒンドゥー教のマントラやサイケデリックポスター、サンフランシスコ・サウンドが入り、対抗文化の理論がいよいよ入り込んでいく。

この年に行われたサンフランシスコでの「BE IN」という集会には約一万人が集まり、「ヒッピー」と呼ばれる若者が熱狂していたが、当時日本にはまだヒッピーと言う語は輸入されていなかった。日本へは、この「BE IN」に参加したゲイリー・スナイダーが「ヒッピー」という語を伝え、この時期から徐々にアメリカ西海岸でのヒッピームーブメントが日本に輸入されるようになる。LSD（麻薬取締法でLSDが禁止になるのは70年）が日本に入ってきたのもこの頃であった。

こうして、「部族」の生活の中に対抗文化の理論のもとに構築された瞑想的な生活実践が形成されていった。自給自足あるいは共同労働、瞑想、そしてヒンドゥー教の神々を称えるマントラ音楽、ロック音楽による祝祭的空間に生きる人々が生まれていった。70年後半に隆盛する「精神世界」の主な関心事は、既に60年代後半に日本の対抗文化人々たちによって実践的に網羅されていたとっていい。

### 3-2. 対抗文化人達の霊性

67年12月に発行された「部族新聞」<sup>9</sup>第一号には、「部族宣言」という文章が掲載され、部族

の理想と共同体の精神が掲げられた。部族社会とは「魂の呼吸そのものである愛と自由と知恵によるひとりひとりの結びつきが支えている社会」であり、部族社会の形成により「人類が死に至るべき道ではなく、生き残るべき道」がつくられる。その道は個々人においては「肉体の死とともに消え去ってしまうべき道ではなく、永遠の不滅の自己」の道であるとされた。

国家、政治、宗教、教育など一般の労働にまつわる社会のあらゆる構造は、中央集権的な構造をしており、それを部族では「ピラミッド」と呼ぶ。特に先進諸国では、幼い頃からそのピラミッドの頂点へと登り、物質的に豊かな生活をするのが目的とされ、その欲望とも知らぬ欲望がさらなる欲望を呼び、ピラミッドは肥大化してゆく。ピラミッドの中では、本来神聖なものであるはずの労働は拘束となり、限りある資源は無駄に消費され、自然環境は汚染されていく。それは自然界のあらゆる生命の死を意味し、いずれは人類が死に至る道でもある。個々人のレベルにおいても、ピラミッドの社会構造においては生産力としての肉体が重要であり、心や魂といったものは肉体の死とともに永遠に消し去られてしまうものとなる。そんな社会構造を拒否し、自らをピラミッド拒否者といい、彼らは権力や統治とはまったく異質な新たな部族社会を建設しようとした。

共同生活の理念とその務めの核心は次のとおりである。部族ひとりひとは、「各自の内面の深みに如何なる論理や倫理をも踏み越えて突き進んでいくところ」にある務めがあり、それは「解脱」「自覚」「実現」である。解脱とは輪廻の輪を超越し、天道に至ることであるが、『ウパニシャッド』<sup>10</sup>では梵我一如を知覚することで果たされるとされている。「部族宣言」のなかでいわれる「解脱」とは、仏の境地に達すること、自らのうちの仏性や神性を自覚し実現していくことであろう。言い換えれば、「ひとりひとは神であるという真理」を重視していくことである。

その務めを修行僧として行うのではなく、「生活というゲーム」の中でなしていく。その場として部族社会が想定されている。独我的な狭い視野ではなく、宇宙的に視野を広げると、「全宇宙は至高の自我」であり「神の戯れ」であるからにして、社会は「ゲームの場」といわれる。ただし、国家社会においては、そのゲームは中央の定めるルールに支配されてしまう。しかし、部族社会では、「愛と自由と知恵の内に内面における時間の流れのほとんど決定的な連続が各自の内に保たれ、(中略)内面深く降りて」ゆくことが可能であり、人生というゲームを空回りするような状態は消え去るといふ。そして「部族宣言」では最後に「大地に帰れ！」という宣言がなされ、ここで人間性の回復が高らかに謳われている。

対抗文化人たちの理想とした共同体には、自己の聖性を実現する生活の希求、つまり霊的なものを求める精神が現れている。中央集権的な社会構造のなかで、失われていく人間性を取り戻すために、彼らは彼ら自身の聖域を創り、“生身に内在する恍惚”を求めていったのであろう。

### 3-3. 「部族」の神意識

部族の中心人物であり、部族の理念をまとめていった山尾三省は、部族の神意識を次のように



書いている。

ほくらひとりひとりは神である。だからほくらは神を実現せねばならぬ。ほくらひとりひとりはすばらしいものである。だからほくらはすばらしくあらねばならぬ。ほくら部族の人間はお祭り種族だと言われている。何を祭るのかと言えば、神を祭るのだ。ほくら自身を祭るのだ。祭りとはよりすばらしくあるように祭るのだ。すばらしさを祭るのだ。宗団宗教とは格別の関係もない。未開種族が梟を祭ったり鷹を祭ったりするように、ほくらは赤鴉を祭り、ガジュマルの夢を祭り、エメラルド色のそよ風を祭る。部族とは神であるひとりひとりの人間が、神であることを願って集まった集まりだから、これから以後数千数万のシンボルが祭られるだろう。(中略)神はひとりひとりであり、ひとつひとつであり、すべてであるのだから、すべてのものは祭られ、すべての部族は部族の神を共有するだろう。世界はそのように開かれており、宇宙はそのように開かれており、ほくらひとりひとりは神である。ほくらは神を実現せねばならぬ<sup>11</sup>。

この記述でわかるように、ひとりひとりの人間は神聖で素晴らしいものであり、世界中のすべての存在の素晴らしさもまた、神聖なるものであり、“神”であるということが高らかに謳われている。森羅万象のあらゆるものを祀り、そのなかに内在する“素晴らしさ”を神とし、さらに、ひとりひとりの人間自身をも神としている。そして「宗団宗教と格別の関係もない」ということが書かれているが、宗教者という宗教界の権威者から神仏の聖性を提供されるのではなく、未開部族の宗教性のように素晴らしきものを祀り、自分自身が感じる“神”を祭ることができるという、非常にパーソナルな宗教性の思想が提示されている。

なんの人格を持たない、名前のない聖性という、一元的な神観念のもとに、その現われとしての多様なシンボル、つまり様々な神や森羅万象がある。究極的には、神人同型論を超え、概念としての「神」ではなく、言語以前の感覚によってのみとらえられる聖性が彼らの神観念の基盤にあるといえよう。「部族」では、そうした神観念の実現を生活のなかの最大の務めとしていたのである。

「自己を見つめ、生きることの目標が、食欲や性欲をただ満たすことや、物質的により豊かな生活をするにあるのではなく、ただ日々平和にゆったりと生きて、そのことを通して自分の心の奥の真理を実現すること」<sup>12</sup>、部族の生活の理想は、このように考えられていた。近代社会の病苦を克服しようとした、部族のオルタナティブな生き方の理想には究極的に「真理の実現」という、新霊性文化の世界観がすでに生じていた。近代批判の先に浮かび上がってくる、「霊性」の側面はアメリカの対抗文化のなかから生まれてきただけでなく、確実に日本の対抗文化人の内部の深い葛藤からも生じていたといえよう。

## 4. 山尾三省の思想

### 4-1. 山尾三省の生涯

山尾三省（1938-2001）は、1938年に東京・神田に生まれた。60年、早稲田大学西洋哲学科中退。67年、「部族」に参加。73年、インド・ネパールの聖地巡礼。75年には、無農薬・有機農法野菜の販売に携わり、長本兄弟商会を設立。77年、鹿児島県屋久島の一湊白川山に移住し、田畑を耕し、詩作し、祈る生活をする。60年に大学生であった山尾は、60年～70年代にかけての反体制的な政治運動が盛り上がりを見せる時期に自らの生涯の方向性を決定付ける選択をした。安保闘争のデモに毎日のように参加しながらも、そのなかにアイデンティティを見出せず、政治的挫折を経験する。そして、政府を転覆させるという全体主義的な考え方よりも、むしろ仲間による自由・博愛・平等を目指す小さなコミュニティの中に生きることに新たなビジョン<sup>13</sup>を持った。そのコミュニティは「魂の自由」「自己の神性の実現」「大地に帰る」といったテーマを掲げ、日本初のヒッピームーブメントの金字塔として注目された。

山尾は一度、父親の経営する自動車の修理工場に就職をしたが、時間的拘束があまりに厳しかったことに不満を持ち、定職を捨て、対抗文化人たちの輪に入っていった<sup>14</sup>。独身の放浪者がほとんどであった「部族」において、妻子を持っていた山尾の存在は異色であった。「部族」は、思想や共同生活の方法論などが未熟であったため、72年には社会の表面から消えていったと山尾は述べている。しかし、「部族」の思想のもとに生じてきた、環境問題への意識や霊性を尊ぶ生き方は確実に社会全体に浸透していった。後に山尾は、次のように述べている。

ぼくはもう「部族」という呼び名にはこだわりませんが、その共同体性という精神と、自然を尊敬する生き方とは、1980年代以後の環境問題を核とする展開の中で、社会的に最も重要な課題として普遍化されざるをえなくなってきました。この市場主義経済の中で、ぼく達の立場はいぜんとして少数派ではありますが、今ではもう「限られた地球に無限の発展はありえない」ことは、小学生でも知っているもうひとつの大きな枠組みとなりました<sup>15</sup>。

「部族」解散後は、家族とともにインド・ネパールの巡礼など自由な精神世界の探求を続け、帰国後には、無農薬野菜の販売を今日のブームに先駆けて開始し、77年に屋久島の廃村に移り住み、自給自足の生活をしていく。晩年には、独自の思想である「アニミズムという希望」を遺し、2001年に62歳でこの世を去った。「精神世界」という言葉が生まれ、ブームとして興隆する10年ほど前から、瞑想的な共同生活という道を選んだ山尾三省。彼の晩年の思想は、アニミズムの提唱による宗教性の解放とエコロジーとを融合した思想へと、大いなる深化を遂げていった。

#### 4-2. 山尾三省の思想—希望としてのアニミズム—

人生に慰めを与えてくれるもの、善いもの、美しいもの、喜びを与えてくれるもの、すべてが「カミ」である世界。山尾は現代社会の希望として、「カミ」を感じずる感性の重要性を説き、アニミズムの思想を提出した。アニミズムとは一般に、生物と無生物とを問わず、万物に靈魂が宿るとする観念のことをいう。アニミズム説は人類学者E・B・タイラーが提唱し、古代人の靈肉二元論に基づく靈魂をめぐる信仰や儀礼体系を最も原初的な宗教としてとらえたものである<sup>16</sup>。靈魂への信仰から次第に多神教、さらに一神教へと高度な宗教文明が確立されたという進歩史観によれば、アニミズムは原始的な未開の文化であると考えられてきた。

山尾のアニミズムは、文化人類学者の岩田慶治のアニミズム観を支持している。岩田は『草木虫魚のたましい』の序文において、人間のころと自然のころという二であって決して一にはならないものが、「私という存在の生のただなかの場所において、すでに、一つになっている」という直感的な事実を「新アニミズム」<sup>17</sup>としてとらえた。東南アジアの調査のなかで、小川のせせらぎや石の輝きに神を見る村人のころに触れ、調査者である自身のころもその村人のころと分けがたいものとなっていったことに岩田の体験があった。西田哲学の最も根源にある「絶対矛盾的自己同一」という概念が実感を通して語られ、私と川原、私と小石とが一つになる、そのドラマの場を神と呼ぶという。人間と自然とが一つになる場として、「絶対的矛盾的自己同一」があるとするれば、それはもはや神と呼んでいいということになろう。岩田は「新アニミズム」という概念で、これを人類文化のあるべき根底の場所にすえた。過去の宗教形態としても考えられるアニミズムが、ここに生き生きとした実感を伴って再び発見されたのである。

山尾は、岩田のアニミズム説を根底にすえて、「アニミズムとは、自然界の万物の中にカミを体験すること」<sup>18</sup>として定義した。宗教学者の鎌田東二は、山尾について「「宗教」という名称以前に生起する人類史的存在感覚をカタカナの「カミ」という言葉や「アニミズム」という言葉で表わ」しているといい、また、宗教性の根幹に息吹く感情を「無名性の慈愛」という言葉で表わしていると指摘した<sup>19</sup>。それは、山尾が諏訪瀬島や与論島、屋久島など、南島の島々で出会った人々の中に、いまなお生きている生活実感としての「土を感じる感性」「火を感じる感性」「海を感じる感性」でもあり、それが「アニミズムの感性」なのである。この感性が、21世紀社会の新たな思想となる所以として、山尾は次のように書いている。

森羅万象に向き合う個人が、その中の一象に意味性や喜びとしてのカミを見出し、それを他者と共有していく新しいアニミズム思想は、個人が個人でありながらそれを超えていく自由を内蔵していると同時に、環境問題という私達に突きつけられてある必須の課題を解決していく、小さいけれども重要な方法論でもある<sup>20</sup>。

個人が個人を超えていくという、近代的自我の克服。森羅万象という多様な対象に、個人が対

峙し、意味性を見出してゆく。対峙するその時点では、主観と客観は区別されている。しかし、意味性を実感した時において、そこには「カミ」という主客未分の場があらわれる。そこに森羅万象との共感共苦が生まれ、ひいては環境問題も解決しようという希望なのである。

#### 4-3. 新靈性文化の世界観との比較

琉球大学での5日間にわたる講義を基にした『アニミズムという希望』（2000）では、山尾が生涯を通じて考え抜いた、現代社会と未来に託すメッセージが綴られている。この本の記述を中心にして、この思想の特徴を示し、新靈性文化の9つの主な世界観を示す表1（p.64）と比較していきたい。

##### (1) 自然としてのカミ

山尾は、人間に一番深い幸福を与えるものは、根源的には「自然としてのカミ」にあると述べている<sup>21</sup>。ここでいう自然とは、木・火・土・水など一切の森羅万象であり、さらには地球そのもの、そして太陽系のことである。この自然は、生命の起源である。137億年前といわれるビッグバン直後に宇宙に最初に出現した水素から、水が生まれ、地球が誕生し、人類も誕生していく生命の歴史を辿る。その長い生命の歴史を想定すると、人間の故郷は地球そのものとなり、太陽系そのものである。自然は人類の命の源であり、そこから生まれ、そこへ還るという事実は、人間に深い幸福感と安堵感をもたらしてくれる。天文学、生物学、化学といった科学的根拠が人類の生命と自然との一致を確かにしているのである。

そして、「カミの起源は、美しいもの、喜びを与えてくれるもの、安心を与えてくれるもの、慰めを与えてくれるもの、畏敬の念を起こさせるもの、そういうものは何でもカミであり、現代においてもそれはいささかも変わらない」<sup>22</sup>という山尾は、一神教の英語大文字のGODではなく、個人個人が感じる小文字のgodを用いる。漢字の神ではなく、片仮名のカミというものが大切で、森羅万象がカミであり、「すべての人の胸の内にはカミという湖が宿されている」<sup>23</sup>と述べている。ここまでの記述をまとめると、自然や人間を超越した神ではなく、自然こそ、そして自然と同一である人間の中にこそ、カミが宿っているという考え方であることが分かる。新靈性文化の世界観である表1の2番目に挙げた「宇宙や自然の聖性、またそれと本来の自己の一体性の認識」に当てはまる。他にも、カミは個人個人の感性によって捉えられるという点では、6番目の「感性・神秘性の尊重」が当てはまる。また、究極的には、人間は自然というカミと同一であるということの根拠に科学的認識を用いる点で、3番目の「旧来の宗教や近代合理主義から靈性／科学の統合へ」との一致もみられる。

##### (2) 宗教に代わる個人の靈性

山尾は、詩の作品のなかでも、カミをあらゆるものに見出しているが、特に「樹木にカミを見出す」ということを勧めている。自分の好きな樹木にカミを見出すということは、「個人によって成り立つ個人のための宗教」<sup>24</sup>であるといい、個人主義を強調する。これは、「カミ（神）ない

し仏に関わる文化、つまり宗教というものは、ある時は狂信性を生み出し、ある時は排他性そのものとなり、ある時は欺瞞のシステムとなり得るゆえに、現代はその価値が地に落ち、ひととおりの理性の持ち主であるならば、そのような道に踏み込むことは愚かなことだとする通念が形成されてきている。そのことは、二十世紀をかけて私達が獲得してきた良識であり、宗教があいもかわらず戦争や社会的悲惨や束縛の原因となっている事実は、もとより容認されるべきことではない。」<sup>25</sup>と述べられているように、束縛と暴力と結びつき、欺瞞のシステムともなりうる宗教に対する批判でもある。山尾は、宗教でなく、宗教性というものを人類に広く解放する思想として、個人の実感に基づいたアニミズムに希望を見出した。また、はっきりと次のようにも書かれている。「新しいアニミズムというものには教祖はいません。教祖はいないし、教条も原則的には何もいないんです。お寺もいない。一人一人が教祖であり一人一人の考えが教条であり、一人一人の胸の内がそのまま寺院であればよいのです。」<sup>26</sup>このことは新霊性文化の世界観でいえば、5番目の「外部の超自然的力やカリスマ的存在に依存する「宗教」に代わって、自立的な個人の覚醒による「霊性」の開発こそ必要とされている」に当てはまる。

### (3) 個人の霊性がエコロジーに繋がる新時代

自然をカミとし、尊敬して崇めるということは、必然的に環境問題やエコロジーの方向性へと繋がる。一般的なエコロジーとの違いをいうならば、自然というカミに対する愛や敬意、感謝がそのままこの問題意識につながっている点である。また、時代を支配してきた「経済成長」、あるいは「科学の進歩」などが神話たりえなくなった時代を見据えて山尾は「第三の神話」を提示している。「自然というものの重要さといえますか、そうした感受性がもう一度よみがえってくる新しい神話が、もう胸のあたりまで立ち上がってきています。これを『新しい自然神話』というふうに呼びたいと思うんです。「新しい自然地球という神話」と呼んでもかまいません。」<sup>27</sup>と述べている。これは近代合理主義の次の時代の出現を意味している。その点では、先の表1 (p.4)の3番目の「旧来の宗教や近代合理主義から霊性／科学の統合へ」や4番目の「現代は人類の霊的進化の大きな転換点である」にも関わってくる。

山尾は、日本中のどこの川の水も飲めるようにしたいというビジョンを持っており、妻と子に残した遺言にも、生まれ故郷東京の「神田川を飲めるようにしたい」という願いを遺している。さらにこのような個人的な願いが、やがては世界を変えることができるというビジョンも同時に強く表現されている。これは、まさに7番目の「自己変容は癒しと環境の変化をもたらす」と9番目の「エコロジーの尊重」に当てはまるだろう。

### (4) 宇宙や自然の聖性と本来の自己の一体性の認識

自然というカミは同時に自己自身である、という究極のリアリティと自己との一体感が求められている様子は、次のように述べられている。

「まこと（真事）」というのは自然宇宙としての対象であると同時に自分自身なんですね。

自己と対象とが調和してひとつに融合した時に、「まこと」であり自分自身であるものがそこに現出するわけですから、それを見つけ出していくのがここで追求している、新しい現代のアニミズムということなのです<sup>28</sup>。

自己と対象、人間と自然とが融合する、その場に真理がある。自然の聖性と「私とは何か」ということを問うこととが一つになっていく。それは、自然の聖性、自己の聖性を認識していくことでもある。山尾はアニミズムという思想を通じて、このことを表わしたかったのだろう。ここに、山尾のアニミズムと新霊性文化の世界観の2番目に当たる「宇宙や自然との聖性、またそれと本来的自己の一体性の認識」に一致がみられる。

#### (5) 死後の生の関心

山尾は16歳の時に、心臓神経症という一種のノイローゼ状態を経験している。心臓が止まってしまうのではないかという死の恐怖に怯える日々を送る経験をしたことによって、自己の「いのち」と向き合うことが長年のテーマとなったという。若い頃から人一倍死の恐怖におびえていた<sup>29</sup>という山尾が、自分自身のいのちを生みだした自然という、根源へと還る死生観を得ていったことも、新霊性文化の世界観の8番目に当たる「死後の生への関心」と重なっている。

新霊性文化の世界観のなかでも死後の生というのは、大きな関心事の一つである。肉体と魂と精神の在り処をめぐって、さまざまな情報が提供されている。山尾も自己の「いのち」を問うことをテーマとしながら、「生死をかける」霊性の地を求めて生きたわけだが、山尾のアニミズムはその究極においては、死後の生の追求ともいえるのである。

山尾は自らの霊性の故郷（＝魂が還る場所）として、三省という自分の名前と三ツ星のオリオン座にシンクロシティを感じたり、屋久島という地そのものに生死をかけたりと、魂の壮大な広がりを実感していた。そのコスモロジーは、森羅万象に自己の魂を返していく、森羅万象という本来的な意味での自己自身に還っていくという深い安堵感をもたらし、そのことによって、山尾が抱いたかつての壮絶な死の恐怖は克服されていったのである。

#### (6) 精神世界について

ここまでで、新霊性文化の主な世界観の9項目のうち、2～9についての世界観と山尾のアニミズムの思想に一致が見られた。しかし、1番目の「自己変容あるいは霊性的覚醒の体験による自己実現」に当てはまるような記述は見当たらない。ここで、新霊性文化つまり、日本でいわれる「精神世界」について山尾が書いている文章をみてみよう。

精神世界、という言葉で求められているあるものは、どこかの宙にあるものではなくて、究極において自分自身であり、自己自身であることを、前提として知っておくことが大切である<sup>30</sup>。

山尾にとっての精神世界とは、「どこかの宙にあるものではなく究極において自己自身であること」とされている。これは自分の外に答えを求めようとして彷徨い続ける“自分探しゲーム”のような、ブーム化する精神世界への批判ともとれる。しかし、新霊性文化の潮流自体を批判しているわけではない。山尾の新霊性文化の理解はこうである。個人主義構造や欲望が渦巻き、人間疎外が進む現代社会の中に、こころの充足をもたらず「慈しみ、慈しまれ、悲しみ、悲しまれ、愛し、愛される」場を見出し、創り出そうとする潮流＝ニューエイジ文化と精神世界。山尾自身、そのニューエイジ文化、精神世界志向の潮流の「一翼をになう」者として自覚している。ただし、自身の精神世界志向性を「伝統的な宗教の諸概念（古い革袋）に現代の解釈を付加して（新しい酒を充たす）、新しい生命を獲得すること」と説明している点<sup>31</sup>では、やはり現代社会の病苦に対して、人類が紡いできた宗教の伝統を、宗教性として蘇らせ、万人に開いていくという志向性が山尾自身の精神世界であったのだろう。

ここまでみてきたように、山尾三省の新しいアニミズムの思想には、新霊性文化の世界観との多くの共通性がみられる。しかし、新霊性文化にもっとも典型的な「自己変容」に関する記述は、ほとんどみられない。これは新霊性文化の陥りがちな霊性の消費傾向には批判的であり、あくまでも、山尾のアニミズムの思想は、宗教伝統に根ざし、かつ現実に即した自己との対峙から始まる思想であることを強調しているのである。新霊性文化がめざす方向性には多様な方向がある。島藺は「日常生活の困難からの脱出を求めて参加し、強烈なカタルシスの体験に酔っている人もいれば、洗練された学問的言説を通して冷静に運動に関わっていく人もいる」<sup>32</sup>と述べているが、山尾の思想や取り組みは、後者の趣が強いだろう。

## 5. 新霊性文化の今—参加者の葛藤

90年代～2010年に至る時期においては、新霊性文化は主流文化へ深く浸透としてきたと解釈されている。現代の健康志向や自然志向、美の意識の向上に伴い、自然との調和を意識したライフスタイルが広く認知・支持され、それまでは社会の周辺に位置していた癒しの空間や自然志向の商品または店舗が街に溢れるようになった。また、ロハスという健康で持続可能なライフスタイルを目指す概念も広く浸透している。さらに、教育や医療・福祉においても「いのち」の教育やスピリチュアル・ケアへの関心が高まっているという。大学アカデミズムにおいて、「死生学」という学問が生まれたことは主流文化への浸透において象徴的である。

「精神世界」は主流文化に浸透していき、ブーム的熱狂は消え去っていくかと思われていた。しかし、2011年3月11日の東日本大震災を機にして、再び「いのち・自然・調和・つながり」といったことが人々の関心を集めている。福島第一原発の事故による放射能汚染の問題は、科学万能主義を崩壊させた。それは同時に、日本国民の多くが新霊性文化の世界観をかつてないリアリティをもって受け止めるようになることを意味するのではないだろうか。実際に震災以後、霊性的知識人<sup>33</sup>らがオピニオン・リーダーとなる機会は増え、自然エネルギーの利用などの

自然と調和する生き方を模索する市民が増えている。それはまるで、60年代以降の対抗文化の主張が改めて再浮上してきたかのようなのである。「部族」や山尾三省らが声高に「大地に帰れ！」と叫び、自然と調和し、本来の人間性を回復させようとした光景が重なって見える。60年～90年代を生き、新霊性文化的な考え方を持った山尾三省が生死をかけて追い求めた霊性は、唯物論的アニミズムへと帰結した。そのアニミズムでいわれる、非生物と生物との間の「親和力」こそ、震災後の日本の希望になるのかもしれない。

震災後の日本では、現代社会に対する不信が人々の意識に浮上している。だがしかし、そこで新霊性文化がただ単純に進展していくかということは大きな疑問である。西平直は、新霊性文化に参加する人々の葛藤を次のように述べている。

ある程度こうした教え（「精神世界」的な教え）に入り込むと、逆に、元気に会社で働くことそれ自体に疑問が生じてくる、伝統的なからだの知恵から見ると、そもそも現代社会の生活スタイルそれ自体、根本からして不自然である。しかも、からだの感受性が豊かになればなるほど、そうした不自然に対して敏感になり、現代社会に対する批判が強くなる<sup>34</sup>。

新霊性文化の世界観を学び、共感を持つようになればなるほど、現代社会の歪みに敏感になる。もちろん、批判や怒りといった感情もでてくるだろう。「調和」を目指し、「自己変容」を求めて学ぶ人々は、その学びをきっかけにして生じた、現代社会との不調和や怒りの感覚によって自分自身を責め、苦しむ可能性がある。真剣に精神世界に入り込めば入り込むほど、精神世界的な考え方と現実社会とのギャップに対する葛藤が始まることになるのである。勿論、その葛藤の力がラディカルな価値観の変革の起爆剤となることもあるだろう。「いのち」の調和と共生という、現代社会へのアンチテーゼに陶醉したとしても、結局は参与者自身が「二元論」を超えない限りは問題にぶつかってしまう。そして、ますます現代社会から阻害されていく自分を感じるようになるのである。

60年代の対抗文化は確かに“対抗”であり非二元論を意図しつつも、二元構造をつくりだした。しかし、対抗の行き詰まりのなかから生じたのは「霊性」であった。わが国において、特別に「霊性」の必要性を謳った人物に鈴木大拙がいる。大拙は『日本的霊性』（1944）で「霊性」を無分別智として理解し、物質と精神の奥にあらわれる霊性について論じ、「超二元論的霊性」を示した。そこには善も悪といういかなる倫理性をも超越した世界が示されている。

哲学者の森岡正博が指摘するように、新霊性文化に関わる人々が「ロマン主義の自閉傾向」の危険性に陥らないためにも、「いのち」に内在する「共生・抑圧」という事実に対して、開かれた認識を持つ必要があるだろう。それこそが本当の意味で、新霊性文化が求めてきた、二元論を超える「霊性」であるのかもしれない。

一方で、「スピリチュアル渡り鳥」といわれる新霊性文化の参与者がいる。次々と多くのヒー



ラー、チャネラーのもとを訪れたり、様々なワークショップに参加したり、スピリチュアルグッズを買い求める彼らは、終わることのない「自分探し」を霊性の消費に任せる。前述の人々とは違って、自己葛藤に蓋をして、無批判に新霊性文化の世界観というロマンに浸りがちな人々である。

日本では2002年から「すぴこん」<sup>35</sup>といわれる大規模なコンベンションが始められた。現在、東京や大阪を中心に、全国各地で「癒しフェア」<sup>36</sup>というスピリチュアル・コンベンションが勢力を拡大している。オーラ写真、占い、リーディング、チャネリング、ヒーリング、コーチング、パワーストーン・波動関連・無添加食品・化粧品等の物販などのブースがコンベンションホールに出展をしている。来場者は入場料を払い、各々のブースを巡っていく。現在、このコンベンションの主催は広告代理店になっており、より市場の論理の追求が進んでいるように思われる。このような宗教性の商業化の傾向は、新霊性文化に表面的に関わり、その場の自己の「癒し」に満足しているようにも考えられる。この点については、研究書のなかでも批判的な見解が多い。

しかし、ある意味では、新霊性文化的な世界観と現代社会とのなかで、上手く折り合いをつけて、生きていくための術のひとつとして、このような傾向があるのかもしれない。新霊性文化的な世界観を求め、ストレスの多い現代社会から完全に離脱してしまうのではなく、物質世界と精神世界の両面に足を置きながら「霊性」を求める唯一の方法としての可能性であるというように、半ば肯定的な共感を寄せることもできる。

ただし、島薮が「最初はこの運動が明るい未来を築く輝かしい運動であると思いがちである。やがて現実はそのほど甘いものではないことに思い当たるとともに、新霊性運動が現代の産業構造や政治体制とも密かに同盟を結んでいる側面があることにも気づくようになる。(中略) そうした醒めた認識の時こそ、新霊性運動の経験の深化が求められる時であり、運動のなかの生の形が人間らしい陰影と光沢とを帯び始める時なのであろう。」<sup>37</sup>と新霊性文化の核心をつく論点を提示している通り、いずれにせよ、新霊性文化の参与者には深刻な葛藤がつきまとう。

新霊性文化を近代超克としてとらえようとすればするほど、対抗文化以来の新霊性文化の歩みを視野に入れ、この世界観のもたらす光と闇を自覚せねばならないのである。

## 6. おわりに

本稿では、日本における対抗文化の営みを新霊性文化のなかで論じる試みをしてきた。こうして日本の対抗文化を新霊性文化の源流としてみてきたことで、アメリカのようにベトナム戦争という問題を抱えなかつたにしろ、環境破壊や人間疎外、資本主義や中央集権という、社会に対する深刻で強靱な問題意識をもって、オルタナティブな生き方を求め、結果として「霊性」を追求する人々がいたことが分かる。

その代表人物として、山尾三省という人物の思想を考察してきたわけだが、生涯をかけて紡がれてきた詩やエッセイのなかで、繰り返し表明されてきた願いは、遺言のなかに凝縮された。山

尾の遺言には「原発と原子力エネルギーを無くすこと」が明示されていたのである。震災後の日本人にとって、60年代以降の対抗文化を経て、「靈性」追求の末に見出された、山尾のエコロジーの思想は今後の歩みの雛形の一つとなりうるものではないだろうか。その雛形は、新靈性文化興隆の背景にある世界的な社会状況、つまり対抗文化が問題とした社会構造を理解し、その問題意識をとらえなおすことによるのみ、確立しうる。

現代社会における、人々の際限のない欲望。消費によってしか得られなくなる充足感。それと同時にますます空虚になってゆく人間の存在意義。失われていく自然環境。60年代以降に盛んに論じられるようになる、こうした先進諸国における現代社会の病苦の克服を目指して、人間性と自然との調和を取り戻すという問題意識に目覚めた人々の言葉は、今なお、重く響いてくる。

山尾の歩みは、対抗文化の問題意識の末に、新靈性文化の世界観が生じるひとつの過程を示唆している。山尾のライフヒストリーとその思想の変容の過程は、対抗文化から新靈性文化への変容の過程と重なる。新靈性文化の研究に、新靈性文化以前の社会状況や文化状況を加えるという視点を持ち、研究を進めた意義はここにある。

新靈性文化が新靈性文化であることを成り立たせた、その背後に存在する対抗文化以来のアンチテーゼを自覚し、その二元論を超える文化の在り方に一人ひとりが問題意識を持たない限り、新靈性文化の発展と深化はないだろう。そうした意味において、新靈性文化研究のなかで日本の対抗文化を新靈性文化の源流として評価していくことは無意味なことではないと考える。ますます、精神的・靈性的な世界観が求められつつある現代。さらに人間の「いのち」のみならず、地球という自然環境の「いのち」に対する共感を持たねばならない時代において、対抗文化から新靈性文化の歩みは、今一度、見直されることになる可能性は高い。しかし、新靈性文化というものが迷信や新たな観念論を生み出すだけの危険な神秘主義に陥らないよう、感性と神秘性を尊ぶとともに科学的思考を離れない道を探求し、対抗文化以来の問題意識を前提としたうえで「靈性」が尊ばれているということを胸に刻んでいかなければならないということを述べて、おわりに換える。

#### 注

- 1 島菌進『現代宗教とスピリチュアリティ』（2012年、p.12）
- 2 島菌進『現代宗教とスピリチュアリティ』p.22 本論文では「新靈性文化」の考察を意図し、「文化」と表記しているが、島菌進はこの語を「新靈性運動 (new spirituality movements)」もしくは「新靈性文化 (new spirituality culture)」として定義している。あるいは単に「新しいスピリチュアリティ (new spirituality)」としている。この新しいスピリチュアリティを「運動」と捉えるか「文化」と捉えるかについては、島菌自身も迷うところがあると述べられている。本論文では、文化現象と捉え、論を進める。
- 3 伊藤雅之『現代社会とスピリチュアリティ』（2003年、p.3）
- 4 上述書、p.4
- 5 島菌進『現代宗教救済論』pp.235-236
- 6 島菌進『精神世界のゆくえ』pp.31-35
- 7 伊藤雅之『現代社会とスピリチュアリティ』pp.14-15

- 8 山尾三省『希望としてのアニミズム』p.63
- 9 山尾三省『聖老人』（1981, pp.125-127）部族新聞は新宿を中心にした街頭で部族のメンバーが一部 100 円で売り、一部につき 15 円が売った者の収入となった。はじめは「ヒッピー新聞！」という掛け声で売っていたが、1968 年夏の二号（6 色刷り 32 ページ）発刊時には「部族新聞」という掛け声に変わり、部族が認知されるようになっていたという。
- 10 辻直四郎『ウパニシャッド』（1990 年, pp.101-111）
- 11 『聖老人』, p.117
- 12 上述書, p.157
- 13 山尾三省『アニミズムという希望』（2000, p.59）
- 14 『聖老人』p.145 60 年安保が終わり、数年して山尾は、妻子を抱えて父親の経営する自動車修理工場に勤める。しかし、山尾だけが月二日のみの休暇だったことから辞職する。60 年安保の経験が、資本体系からの離脱へと繋がり、さらには辞職することで肉親からさえも離脱することになった。従って、原始共産制の直接的実現という考えに至ったことは不自然なことではなかった。「自分の意のままに生きると決めた時、私一個の肉体と意識が、ある光に輝いたのを覚えている」「思想は実現されねばならないという思いの結果であり、実現ということにこそ重みが置かれた」ということが書かれている。
- 15 『アニミズムという希望』p.63
- 16 岩田慶治『カミの誕生—原始宗教』（1990 年, p.151）
- 17 岩田慶治『草木虫魚のたましい—カミの誕生するとき・ところ』岩田慶治著作集第二巻（1995 年, p.8）
- 18 山尾三省『リグ・ヴェーダの智慧—アニミズムの深化のために』（2001 年, p.16）
- 19 鎌田東二『霊性の文学 言霊の力』（2010 年, p.213）
- 20 『希望としてのアニミズム』p.394
- 21 上述書, p.40
- 22 上述書, p.44
- 23 上述書, p.135
- 24 上述書, p.55
- 25 上述書, p.393
- 26 上述書, p.143
- 27 上述書, p.92
- 28 上述書, p.40
- 29 山尾三省『いのちの春夏秋冬』（2008 年, p.30）山尾は 16 歳の時に心臓神経症という一種のノイローゼ状態を経験している。今すぐ心臓が止まってしまうのではないかとこの死の恐怖と向き合うことで、自己の生命と向き合うことが長年のテーマとなったという。
- 30 山尾三省「精神世界の森」『朝日ジャーナル』（1991 年 4 月, p.149）
- 31 山尾三省『観音経の森を歩く』（2005, p.146）
- 32 『精神世界のゆくえ』p.308
- 33 『精神世界のゆくえ』p.250 島菌は、新霊性文化に関わり、あるいは、その外側にいながら、宗教や霊性について積極的に発言し、高い評価を得ている人物を「霊性的知識人」と呼んだ。岩田慶治、梅原猛、鎌田東二、河合隼雄、栗本慎一郎、中沢新一、見田宗介、山折哲雄、湯浅泰雄が挙げられている。
- 34 西平直「知の枠組みとしての「精神世界」—共感的理解と批判的検討」『教育学研究』（第 66 巻第 4 号 1999 年 12 月, p.19）なお、引用箇所は括弧内は、筆者の注釈である。
- 35 小柳太郎・桜井義秀「すびこん」『よくわかる宗教社会学』pp.138-139
- 36 癒しフェアは 2005 年から広告代理店フレイアを中心にして開催されている。「癒し」というネーミングのもと、有名芸能人や医師の講演などもあり、スピリチュアル色を「健康」「美」に変換させてコンベンションが行われている。宣伝広告には、精神世界の特殊なイメージが消されているが、会場の中は精神世界そのものの出展となっている。筆者は 2013 年に開催された大阪「癒しフェア」を調査している。
- 37 『精神世界のゆくえ』p.293

## 参考文献

- 島蘭進『精神世界のゆくえ—現代世界と新靈性運動』, 東京堂出版, 1996年
- 島蘭進『現代救済宗教論』, 青弓社, 2006年(初版, 1992年)
- 島蘭進『現代宗教とスピリチュアリティ』, 弘文社, 2012年
- 伊藤雅之『現代社会とスピリチュアリティ—現代人の宗教意識の社会的探求』, 溪水社, 2003年
- 島蘭進「救済からスピリチュアリティへ: 現代宗教の変容を東アジアから展望する」『宗教研究』第84巻2号, 2010年9月, pp.331-358
- 伊藤雅之, 樫尾直樹, 弓山達也編『スピリチュアリティの社会学—現代世界の宗教性の探求—』, 世界思想社, 2004年
- 芳賀学, 弓山達也『祈る ふれあう 感じる』, IPC INTER PRESS CORPORATION, 1994年
- 櫻井義秀, 三木英『よくわかる宗教社会学』ミネルヴァ書房, 2007年
- トーマス・ルックマン(赤池憲昭, ヤン・スィングドー訳)『見えない宗教』ヨルダン社, 1976年(原著, 1967年)
- 別冊宝島編集部『精神世界マップ(別冊宝島16)』, 宝島社, 1996年(初版, 1980年)
- 山田塊也『アイ・アム・ヒッピー』, 第三書館, 1990年
- 山田塊也『トワイライト・フリークス—黄昏の対抗文化人たち』, ビレッジ・プレス, 200年
- アレン・ギンズバーク(諏訪優訳)『ギンズバーク詩集』, 思潮社, 1991年
- ジャック・ケルアック(福田実訳)『路上』河出書房新社, 1959年
- ジャック・ケルアック(中井義幸訳)『ザ・ダルマ・バムズ』講談社, 2007年
- ローレンス・リプトン(山屋三郎, 田辺五十鈴訳)『聖なる野蛮人』, 荒地出版社, 1960年
- シオドア・ローザク(稲見芳勝・風間禎三郎訳)『対抗文化の思想』, ダイアモンド社, 1972年(原著, 1968年)
- シオドア・ローザク(志村正雄訳)『意識の進化と神秘主義—科学文明を超えて』紀伊國屋書店, 1978年(原著, 1975年)
- 山尾三省『聖老人—百姓・詩人・信仰者として』, ブラサード書店, 1981年
- 辻直四郎『ウパニシャッド』, 講談社, 1990年
- ゲイリー・スナイダー, 山尾三省『聖なる地球のつどいかな』, 山と溪谷社, 1998年
- 『定本 真木悠介著作集I—気流の鳴る音』, 岩波書店, 2012年
- 平賀出版社『ザ・メディテーション』
- 山尾三省『聖老人—百姓・詩人・信仰者として』, ブラサード書店, 1981年
- 山尾三省『アニミズムという希望』, 野草社, 2000年
- 山尾三省『カミを詠んだ一茶の俳句—希望としてのアニミズム—』, 地湧社, 2000年
- 山尾三省『森羅万象の中へ—その断片の自覚として—』, 山と溪谷社, 2001年
- 山尾三省『深いことばの山河—宮沢賢治からインド哲学まで』, 日本教文社, 1996年
- 山尾三省『帰る月々の日—続・縄文杉の木陰にて』新宿書房, 1990年
- 山尾三省『観音経の森を歩く』, 野草社, 2005年
- 山尾三省『法華経の森を歩く』, 水書坊, 1999年
- 山尾三省『リグ・ヴェーダの智慧—アニミズムの深化のために』, 野草社, 2001年
- 山尾三省『原郷への道』, 野草社, 2003年
- 山尾三省『春夏秋冬—いのちを語る』, 南方新社, 2008年
- 山尾三省『祈り』, 野草社, 2002年
- 『岩田慶治著作集第二巻—草木虫魚のたましい—カミの誕生するとき・ところ』, 講談社, 1995年
- 見田宗介『現代社会の理論—情報化・消費化社会の現在と未来—』, 1996年, 岩波書店,
- 鎌田東二『言霊の力—霊性の文学』, 角川学芸出版, 2010年
- 鎌田東二『神道のスピリチュアリティ』作品社, 2003年
- 樫尾直樹編『文化と霊性』慶應義塾大学出版会, 2012年
- 現代宗教研究所『現代宗教—2010』, 秋山書店, 2010年
- 山尾三省「精神世界の森」『朝日ジャーナル』, pp.147-150, 1991年4月

- 鎌田東二「神道におけるスピリチュアリティと靈性」『科学とスピリチュアリティの時代—身体・気・スピリチュアリティ』、ビイングネットプレス、2005年、pp.264-271
- 高田宏「山尾三省「死を貫く生の根拠」」『季刊銀花』、No.149、2007年3月、pp.171-173
- 西平直「知の枠組みとしての「精神世界」」『教育學研究』第66巻4号、1999年12月、pp.395-405
- 森岡正博『宗教なき時代を生きるために』、法蔵館、1996年
- 鈴木大拙『日本の靈性』、角川学芸出版、2010年